

第六回「いのちの授業」大賞 受賞者一覧

【大賞（知事賞）】作品名 お母さん大切な命をどうもありがとう

筆者 島村 和奏

授業実践者 島村 智子

保護者

1

【教育委員会賞】作品名 大切な人の命

筆者 柿崎 宙輝

授業実践者 柿崎 亜希子

保護者

3

【神奈川県新聞社賞】作品名 命について

筆者 角田 真一

授業実践者 藤曲 和美

藤曲牧場主

5

【テレビ神奈川賞】作品名 福祉講演会のお話を聞いて

筆者 藤川 遥

授業実践者 戸田 忠澄

川崎いのちの電話

7

【神奈川県PTA協議会会長賞】作品名 一しゅうかんだけのペット

筆者 赤瀬 美凜

授業実践者 大河内 泉

9

開成町立開成南小学校 一年

開成町立開成南小学校 教諭

【審査員特別賞】 作品名 いのちの授業

筆者

篠島 早優

厚木市立緑ヶ丘小学校 五年

授業実践者

山浦 直子

神奈川県助産師会いのちの授業事業部助産師

【優秀賞】 作品名

筆者

親子の死から学んだこと

吉川 遥香

神奈川県立相原高等学校 二年

授業実践者

藤曲 和美

藤曲牧場主

【優秀賞】 作品名

筆者

コストを利益に変えるため、私達にできること

塗井 のどか

神奈川県立相原高等学校 二年

授業実践者

藤曲 和美

藤曲牧場主

【優秀賞】 作品名

筆者

命の重さ

海老名市立有馬中学校 一年

授業実践者

時田 愛子

保護者

【優秀賞】 作品名

筆者

命てんでんこ

開成町立文命中学校 二年

授業実践者

遠藤 仁一

開成町立文命中学校 校長

【優秀賞】 作品名

筆者

カンタータ「土の歌」を鑑賞し、
調べ学習を通して「いのち」について考えたこと

授業実践者

高向 みのり

神奈川県立港北高等学校 二年（二年次の作品）

授業実践者

山本 良子

神奈川県立港北高等学校 教諭

大賞(知事賞)

お母さん大切な命をどうもありがとうございました

藤沢市立八松小学校

五年 島村 和奏

四年前、私の妹の命は生まれた。そのときのことを思い出したらまだ泣いてしまう。

小学校の入学式から数日後、お父さんから

「さいたまの学校に転校するよ。」

と言われた。私は、なんで？どうして？と色々な気持ちが混ざり合って、お姉ちゃんといっしょにたくさん泣いた。そして、一週間後にさいたまのおばあちゃん家に引っこした。

お母さんは、病院の先生から安静にするように言われたので毎日ベッドでねていた。私は、さいたまの学校に初めて行った。先生もやさしく、一年四組のみんなも支えてくれた。学校になれてきたころ、家に帰る時のおむかえがお母さんのお姉ちゃんだった。いつもは、おばあちゃんなのに、。わたしは「お母さんになにかあったのかなあ」と思った。家に帰るとやっぱりお母さんはベッドにいなかった。

「お母さんは出血をして、きん急入院になったんだよ。」と、聞いた。私は、心配で心配でたまらなくて大泣きしてしまった。泣いても泣いても、なみだが止まらなかった。

お母さんは全前置癒着胎盤で入院した。全前置癒着胎盤というのは、胎盤が完全に子宮口をふさいでいて胎盤と子宮がくっついて離れない状態のことで、それはとてもめずらしいものだ。けれど、その時私は一年生だったのでよく分からなかった。とにかく、お母さんが家にいないことがとても悲しくてたまらなかった。

次の日、お母さんのお見まいに行ったらお母さんが車いすにすわっていて、私は固まって頭が真っ白になった。どうして、どうしてなんでお母さんがこんなことになったの。なんで、なんで。私は泣きそうになった。でも、お母さんもつらい思いをしているのにここで泣いたら、お母さんも泣いて悲しくなっちゃう。私は、なみだをこらえて歯をくいしばった。「これから、どうなっちゃうの？」私は思った。いろいろな気持ちでふぐざつになった。

それから、お母さんがおばあちゃんの家に戻ってくる三ヶ月間、毎週のようにお見まいに行った。お母さんに会うのも楽しみだ。たけれど、おなかの赤ちゃんと話しかけるのも楽しみだ。でも、お母さんは手がふるえていてたいへんそうだった。私は、また泣くのをこらえた。これで死んでしまったらどうしよう。でも、きつとだいじようぶ。私は信じ続けた。

お母さんがいない間、おばあちゃんは、がんばってくれた。私達は、たくさんの人に支えられた。とても悲しかったけど泣くと悲しい気持ちがふえるだけ。私は泣かずにがんばった。学校でも、家でも支えてくれる人がたくさん。人は、やさしい支えになると

思った。

毎日、朝と夜にお母さんにメールをした。絵もたくさん描いて病院に持っていった。お見まいも、メールも絵もお母さんのことを元気づけられると思った。私は、これから出来るだけ泣かない。それもお母さんが元気になる。そう心の中で決意した。「悲しいことも、大変なことも、お母さんとみんなで乗りこえれば大丈夫だよ。」私はそう思った。でも、一人で泣いてしまうこともあった。

いよいよ明日が出産の日。私はドキドキした。通学中、授業中とっても心配だった。『神様おねがいます。無事に出産が終わりませうように。がんばればがんばれお母さん。』と、わたしはずっとずっと願っていたので学校でも、この日だけは勉強や先生の話に集中できなかった。ドッキドッキしながら、家に帰って、

「どうだった??」

と、あわてて聞くと

「無事、出産したよ。」

と、おじいちゃんが言った。私は、まずホッとしました。次に、私は今日からお姉ちゃんだ！今日からお姉ちゃんになったんだ！やった！と、とてもうれしくなった。うれしくてうれしくてたまらなかった。

赤ちゃんは、一カ月半早く生まれとても小さかったけれど、とても元気だったらしい。お母さんは、赤ちゃんの命を一生けん命守った。赤ちゃんを出産したあとも、まだ何時間も手術室にい

てたくさん出血してたくさん輸血をしながらがんばった。知らない人たちのやさしさの血。色々な人のおかげで、お母さんの命は助かった。お母さんの体の中の血は全部、知らない人の血になった。私は、みんなの力で妹が生まれて、一人で出来ないこともみんなと協力すれば出来ることもある。お母さんも妹もがんばった。お母さんは、二リットルのペットボトル三本も出血したそうだった。

もし、輸血してくれる人がいなかったら、お母さんも、妹も亡くなってしまっていた。この、お母さんの出産のことから命の大切さを知った。そして、みんなの力で生まれた妹は、元気に育っている。私は命と心、人はつながっていると思った。みんなで守って生まれた妹の命。命は短いけれどとても大切。命が、なければいなくなる。妹の出産はともむずかしく大変だった。私は、泣いて泣いて泣きまくった。思い出したら、まだたくさん大泣きしてしまう。命のことについてすごく学んだ。命の大切さを。

みんなで守った妹の命はもう四才にもなった。生まれた時は小さく、でも今はとても大きくなった。命はとても大切にしなければならぬ。これからも、妹と母、家族を私は大切にしようと思った。私が大人になって出産する時は、まためいわくをかけるかもしれないけど、命はまた神様が見守ってくれることだろう。そして、命は大きく元気に育つだろう。お母さん、大切な命をどうもありがとう。

教育委員会賞

大切な人の命

横須賀市立鷹取小学校

五年 柿崎 宙輝

母が病気になった。それを知ったのは、母が病気を知ってからしばらくしてからだった。

「ちよつと調子悪いから、検査してくる。」

そう言っ出て出かけていった母が帰宅すると、しばらくして、血相を変えた祖父母が家に来た。ぼくは、部屋にいたが、母のすすり泣く声が聞こえて、これはただ事ではないと思った。

しかし、次の日の朝、母はいつもと変わらず元気な笑顔で、

「おはよう。」

と、言ってきたので拍子抜けした。昨日のはかんちがいったのだらうと思った。

でも、かんちがいではないということが、毎日の生活で分かってきた。祖父母がひんばんに家に来ては、母の代わりにそうじや洗たくをしたり、母の様子を見に来たりしているのは、何も知らなかったぼくにも、これはおかしいとわかった。母の体が大変なことになっていると。

同時期にテレビで、ある芸能人が病気とたたかっていることを知った。母が同じ病気ではないことを願って、祖母に聞いた。

「お母さんは何の病気なの。」

それを聞いた祖母は、ためらいながらも教えてくれた。その芸能人と同じ病気だと。

それを聞いても、まだ実感がなかった。なぜなら、その病気がどんな病気だか知らなかったし、何よりも、母はいたって変わらず元気な様子だったからだ。何かのまちがいなのではと祖母に聞いてみたが、まちがいではないことと、母にストレスを感じさせないこと、疲れさせないこと、生活の中で母を助けてあげてほしいことを言われた。

それを聞いて現実なんだと思った。母は、ぼくに心配させないように話をしないのだと思い、ぼくも母の気持ちを考え、聞かないことにした。その代わりに、ぼくができることは何かを考えた。

母が病気だと分かってから、今まで元気だと思っていた母の様子が、やはりそうではなかったのだと気づいた。仕事から帰ってきた母は、ソファで横になることが増えた。休みの日も、家事をした後は寝ていることが増えた。そして何より、笑顔が減った。お風呂で泣いていることもあった。でも、ぼくが母の前に行くと、笑顔でいつも通りに見せようとした。

ぼくは何もわかっていなかった。今まで心配をさせないように、母はわざと元気な様子を見せていたのだ。母は、自分が死ぬかもしれないという恐怖とたたかいたながらも、ぼくが心配しないように、いつもと変わらず生活できるようにと、病気にな

ってからも自分よりぼくを思ってくれていたのだ。

今、母は手術を終え、しばらく仕事を休んだが、すぐに復帰して、今までと同じように働いている。手術を終えた母に、病気のことを知っていると話すと、おどろいた表情と同時に、泣きながら、

「ごめんね。」

とあやまってきた。

いつも強くて優しい母だが、この時初めて弱くてつらい思いをしている母を感じた。病気についてもどんな病気を教えてくれた。それと同時に、母は生きるためにちりようを続けること、ぼくは何も心配しなくていいことを話してくれた。

母の気持ちを聞くことができてよかった。ぼくは今、母からそうじや洗たく、料理を教えてもらっている。これは、母が突然いなくなっても困らないようにではなく、母に少しでも楽をしてもらってちりように専念してもらうためだ。母には笑顔で生きてほしい。

ぼくのことを大切に思ってくれる母は、ぼくにとっても、とても大切な人だから。

神奈川新聞賞

命について

神奈川県立相原高等学校

二年 角田 真一

私は今、相原高校畜産科に通い、畜産部に入部していません。そこでは家畜の生態や管理方法について学び、また野菜を育てたりしています。

なぜ、私が相原高校に入学したかという、命について知りたいと思ったからです。私がまだ相原高校に入る前、スーパーに買い物に行った時でした。「これらの肉や卵、牛乳はどうやって作られるのだろう」そう感じた私は、牛乳が作られるまでの事を調べてみました。すると、私の予想をはるかに超えるスケールで驚きました。

まず、酪農家さんについて、私は牛に草を与えるだけで牛乳が出るものだと思っていました。しかし、牛の体調や気温に気をつけながらエサの草の量を減らしたり、搾乳時に乳頭から菌を入らせないように素早く乳頭を拭いて搾乳器具をつけたり、牛を驚かせないように静かに動くなど、細かい配慮が行われていることを知りました。

次に、牛に種をつけてくれる人工受精師についてです。私は、牛は何もしないでも牛乳が出せるものだと思っていました。し

かし、牛乳を出すには妊娠し、子牛を産んだ後、出てくるものだとなりました。そのため、雌の牛に雄牛の種をつける必要があります、そこで人工受精師の方達が必要なることを知りました。

これらの事を知った私は、乳牛など家畜について学べる相原高校に進学しました。牛など家畜の知識を勉強していくうちに酪農についてもっと知りたいと思った私は、相模原市で酪農を営む藤曲和美さんの牧場に実習に行かせてもらうことになりました。藤曲牧場では牛の管理や搾乳をさせてもらう他、相原高校では体験できない酪農技術を学ばせてもらっています。通い始めてしばらくたったある日、私は初めて牛の誕生を見ることができました。私は母牛が子牛を産むとき楽に産むことができると思っていました。が現実はその簡単にはいきませんでした。子牛が産まれてくるにつれ、母牛の息は荒く一生懸命見守りました。中々出てこないのです、藤曲さんの指示で子牛の前足に口ブをつなぎ少しずつ引っ張りました。母牛の息はますます荒くなり心配しましたが、ついにお腹の中から子牛が出てきました。羊水で濡れた体を拭いてあげると、出てきたばかりなのにヨロヨロしながらも立とうとしており、そんな姿を見て心打たれてしまいました。

その時私は命について分かったことがありました。それは、いつもなにげなく食べている肉や卵、牛乳は命が続いてできたものだ。また、それらを食べる人間達によってまた命がつけられていることです。

私は、この高校生活で学んだことを活かして将来、命について色々な人達に教えることができる仕事をしたいです。私の言葉によって子供達や大人に命の大切さを分かってもらえるように頑張っていきます。

テレビ神奈川賞

福祉講演会のお話を聞いて

秦野市立南中学校

二年 藤川 遥

学校の総合的な学習の時間で恒例の福祉講演会が行われました。私たち三組は川崎いのちの電話から、戸田さん、有田さんにお越しいただきました。

この講演会では、「感じよう ひとりひとりの命の重さを」をテーマに、様々なお話を聞きました。

私たちのクラスでは始めに「事前アンケートについて」お話していただきました。主に四つあります。

一つめは、「うれしかったこと」です。クラスの人は「部活での試合に勝ったこと」などの「自信」につながることや、「誕生日をお祝いしてもらった」などの「愛されている実感」につながることを書いていたそうです。

二つめは、「かなしかったこと」です。クラスには「おじいちゃん、おばあちゃんが亡くなってしまった」などの喪失感というものを書いている人が多かったそうです。

三つめは、「大切なもの」です。クラスには「家族」や「友達」という「関わり」つまり、「分かちあえる人がいる」につながることを書いている人が多かったそうです。

四つめは、「これからやりたいこと」です。クラスには「〇〇の選手になりたい。」などの夢を具体化した「目標」につながることを書いている人がいたそうです。

この四つの項目には「自分が生きている価値」が共通していることが分かります。つまり私たちひとりひとりが、命がある意味があるということです。でも私には、こんな経験がありませんでした。

私が小学校四年生のころ、いじめにあいました。その時はずっとひとりで悩んでいて、誰にも恥ずかしくて話すことができませんでした。ある時は、自殺も考えました。でも、お母さんは私の異変に気づいてくれて全て話すと、「自分は親にとつて大切なんだな。」と気づき、自分の生きている価値が身にしました。

あの時は苦しかったけれど、あの経験がなければ、いじめを考えるイベントや今回の講演会はペラペラの紙としか思えなかったと思います。

私はあの時お母さんに助けてもらいましたが、助け船が来てもスルーしてしまう人はたくさんいると思います。そんな人を見捨ててしまうのでしょうか。助けられる場所はないのでしょうか。

私はそうは思いません。助けてもらえる所はあるはずですが。家族や先生、教育相談所、そしていのちの電話。いのちの電話とは悩みを解決したり、一緒に考えてくれたりするところです。

いのちの電話には、中学生だけでなく、サラリーマン、夫婦、お年寄りなど年代を問わず数多くの方が相談をしています。例えばサラリーマンは「会社がつぶれてしまい、他の所に就職したいのですが受け入れてくれない。」などがよく聞かれるそうです。そして話をしていくうちにネガティブだった人がポジティブになって「ありがとう」と言ってくれるそうです。ここにも人との「関わり」が表れています。

また、中学生には「かわさきチャイルドライン」もおすすめです。そこには四つの約束があります。

- 一、やくそくは絶対にまもるよ
- 二、どんなこともしよにかんがえるよ
- 三、ひみつは絶対にまもるよ
- 四、きりたいときはきっていいよ

の、四つです。この四つの約束があれば相談しやすいですね。しかし、ここ最近相談件数が減っているそうです。どうしてかというと、SNSで知り合った人に相談したり、この前もニュースにありましたが、「#自殺希望」とはり付けし自分を助けてくれる人を見つけたりするからです。こういう手口を考えて私は、正しい対応を知っているのか、指示してくれるのか、顔が分からない人に助けを求めるのはどうかと思いました。

このように、私の経験もふまえて紹介させていただきましたが、私はこの講演会のお話を聞いて改めてひとりひとりの命の重さを感じられました。感じられたポイントは三つあります。

一つめは、人との「関わり」、つまり分かりあえる人がいること。二つめは、「自分が生きている価値」がひとりひとりあること。三つめは、「悩んだときは信頼できる人の力を上手に活用する」ことです。この三つのポイントを胸にきざんでこれからの学校生活そして、人生を楽しく過ごしていきたいです。

神奈川県PTA協議会会長賞

一しゅうかんだけのペット

開成町立開成南小学校

一年 赤瀬 美凜

まいとしなつに、一しゅうかんだけペットをかうことにしています。きよねんはクワガタで、ことしはどじょうです。

パパとかわでさかなを三びきつかまえました。つぎの日、二ひきしんでしまいました。のこった一びきはどじょうでした。パパは「その一びきもすぐにしんでしまうから、きょうかわにかえそう。」といいました。

だけど、わたしは「しなないようにどじょうについてちゃんとしらべてそだてるから、一しゅうかんだけかう。」ときめました。ママとどじょうのことをたくさんしらべて、がんばりました。

どじょうのなまえは「どん」にしました。すいそうになまえをはって、みんながわかるようにしました。みんなは「どん」「どん」といっぱいよんでくれました。どんもよろこんでいました。

どんがいたかわにいつて、くさやすなやいしをもってかえってきました。すいそうのなかはかわとそっくりになりました。どんはくさのかげにかくれたり、はやくおよいだりして、たのしそうでした。わたしもたのしいきもちになりました。

なつはみずがあつくなくなってしまっているので、一にちになんかいかがおりをいれて、みずをつめたいままにしました。さかなはみずのなかでチツチやウンチをします。きたないみずのままだとびょうきになってしまうので、まいにちみずをかえました。

どじょうはじぶんでみずのうえにかおをだして、いきをすつたりはいたりします。だからブクブクのきかいはかわなくてよかったです。エサはきんぎよのエサをよしいしました。はじめはたべなかつたけれど、さいごはパクパクたべるようになって、しんぱいがなくなりました。

一しゅうかんだつた日に、おじいちゃんやおばあちゃんたちといっしょに、どんをかわにかえてあげました。このかわは、どんがすんでいたかわにつながっています。かわをおよいでいくとなかまにあえます。わたしはどんときよならはさみしかつたです。だけど、どんはほんとうのかわにもどれて、うれしいとおもいます。

一しゅうかんだけだつたけれど、どんがしなないようにいっしょうけんめいそだてました。ペットをかうときは、そのがちゃんとけんこうにいけられるように、にんげんがしないといけません。

らいねんのなつも、なにかいきものを一しゅうかんだけかいたいです。いちばんちいさいもうとがしようがくせいになったら、どうぶつをずっとかいたいです。

どん、うちにきてくれてありがとう。ずっとずっとげんきでね。

審査員特別賞

いのちの授業

厚木市立緑ヶ丘小学校

五年 篠島 早優

私は、この授業を通して自分の家族や友達の名の大切さなどが良くわかりました。

この授業をしに来てくれた方々は、にんぷさんと山浦さんという助産師さんでした。

私のお母さんは看護師で、今までいろいろな病とうで仕事をしています。なので、山浦さんと同じだなと思いました。

山浦さんが話してくれたことは、だいたい理科の授業で学んでいたのわかっていました。ですが、細かいことまではわかりませんでした。特に赤ちゃんができる最初の受精卵は0.1ミリメートル位だと習っていたけれど、本当の大きさは0.14ミリメートルだと聞いてとてもおどろきました。

そして、山浦さんが最後に言っていたことにピンとききました。それは、「産まれてくるけれどすぐに亡くなってしまいう子や、障がいがある子などがいるんだよ。」という話でした。

なぜピンとききたかという、私の妹が障がい者だからです。私の妹は産まれてすぐにアレルギーや体に障がいがあることがわかりました。ですが、私の妹は逆子ではなく、私と同じよ

うに産まれてきたんです。

なのに、なぜ妹だけ障がいがあるのかが山浦さんの話を聞いて、今になって不思議に感じました。

時々妹が苦しんでいるような所をみると、なんで妹だけがこんなことをしなくてはいけないのかと思うことも多数ありました。

また、妹が学校に入る前にほいく園に入っていました。いつもいる所は小さい子どもがいる所で、同じ学年の子どもたちがいる所に行くのは遊ぶときや、休み時間でした。

でも私は、妹の学年の子たちに「ありがとう」と言いたい気持ちになりました。理由は妹が同学年の組に行ったら、みんなが妹に気づいて、「まってたよー」や「いっしょに遊ぼう」などと話しかけてくれて、妹もみんなの気持ちや声が聞こえ、伝わったからかとても笑顔になっていたからです。

みんなが妹をかわいがってくれたから、今まで妹も笑いながらほいく園で生活できたのではないかなと思いました。

なので、みんなに「ありがとう」と言いたいです。今、妹は養護学校に通っています。学校のみんなに「何で、妹はこの学校に通っていないの？」と聞かれるけれど、妹のことは、「私と同じ人間だし、障がいがあるうともみんなと同じだから、別にかくすことなんて、ない！」と思いながらみんなに話しています。

このようなことが山浦さんの最後の言葉で思ったことです。

山浦さんの「自分の命は一つしかない。だから自分の命をちやんと守りなさい。」という言葉がとても心にさざりました。

私は、妹を苦しませたくないとも思っています。今はまだ魚介類や豆、大豆などがアレルギーですが、だんだんそれも少なくなってきました。

私たちと同じ食べ物を食べられるのはとてもうれしいです。アレルギーのものも、食べられるように願っています。

私は妹がもつと元気良く、健康に育ってほしいです。そして、もつと妹が幸せになるように育ってほしいです。

山浦さんからは、妹は「きせきの子ども」と言われているようにこの授業で感じました。

私は、この授業を受ける前までは、自分の中でいやなことがあつたらお母さんやお姉ちゃんにあたってしまい、私がいるせいでイライラしているのではないかと思ひ、「死んだほうがましだ」「死にたい」などと思うことがあり、家でノートに書いていました。

ですが、山浦さんの話を聞いていると、私の中で色々なことが変わっていきました。

それは世界中にはいろいろな病気などで亡くなる人が多くいますが、私は病気もなく健康に育っている。そして食べ物が食べられない子どもたちに食べ物をわたしたいけれど、それはできない。だから、食べられない量をおかわりせず、食べ物を残さないように気をつけたいと思いました。

そして、命は一人に一つしかない「宝物」だから、一つの宝物、命を大切に、これからも生きていきたいです。

優秀賞

親子の死から学んだこと

神奈川県立相原高等学校

二年 吉川 遥香

相原高校の部活動の一環として、私は一カ月に三〜五回ほど牧場実習に行かせていただいています。牧場実習先は、約三十頭の牛を飼育していて、経営者の方は、相原高校のOBです。

ある日、牧場実習に行くと言ったのは、「分娩予定日を過ぎていて牛がいる。」と心配していました。その牛はその日も分娩の兆候すら見られません。その数日後に、実習に通う他の部員からその牛が分娩したという連絡があったのですが、その内容は「母牛が子宮捻転を起こし、子牛は死んでしまいました。」というものでした。しかし、その牛は分娩したため例え子牛が死んでしまっても牛乳を出すことができます。本来なら子牛を育てるために母牛が出している牛乳を人間が頂いている裏側には、子牛が死んでしまうこともあるということ、母牛から牛乳を分けてもらっている人間は知ってなければならぬのだと感じました。

分娩したその牛にはまだ大きな問題がありました。母牛の体内で大きく成長しすぎた子牛を産んだため、乳房を支えていた中央にある靱帯が切れてしまい乳房が垂れ下がってしまったと

いうことです。乳房が垂れ下がった事で牛乳を搾るミルクカーが四本同時につけられず、左二本、右二本とバラバラに搾るため他の牛の倍の時間がかかってしまうということでした。また、乳頭と床との距離が近くなってしまい乳頭口から菌が入り、計二回の乳房炎になってしまいました。

酪農家は経営の事を考えなければならぬため、経営者の方は「廃牛にするしかない。」と決断したのです。その牛は分娩してから約二カ月で牛乳を出すという役目を終えました。

私は、相原高校に入学するまで牛乳の裏側にこんな事実があるとは知りませんでした。この事実を知った今、経済動物である牛も人間と同じ命であるのだから、寿命まで全うして良いのではないかと思う一方、人間が生きるための経済動物なのだからしょうがないという考えもありとても複雑な気持ちです。

牛は子牛を産まないと言われませんが、しかし、子牛を産むというのは母牛または子牛、最悪の場合はどちらともが死んでしまうという危険が伴っているということ、牛乳は牛達の命を分けてもらっているということをもっと多くの人に知ってもらい、常に感謝の気持ちを忘れないでほしいと思います。

優秀賞

コストを利益に変えるため、私達にできること

神奈川県立相原高等学校

二年 塗井 のどか

私は、「自然豊かな土地でのびのびと暮らす牛たちがいる。」そんな酪農に憧れて相原高校畜産科学科に入学しました。牛、豚、鶏など様々な家畜がいる中で、私は相原牛プロジェクトへの所属を決めました。

毎日、朝夕と牛の飼養管理を行う中で、より高度な技術や知識を身に付けたいと思い、相原高校の卒業生で現在酪農を営んでいる方のもとでの実習を行っています。約二十五頭の搾乳牛がいるため、分娩の割合も学校より高く、多いときにはひと月で三頭以上もの子牛が産まれることがあります。今年の二月にホルスタインのメスの双子が産まれました。しかし、どちらも通常の子牛のサイズで産まれてきたため、母牛への負担が大きすぎて、分娩後立つのもやっとな状態でした。一日二回の搾乳も十分に出来なかったため、他の搾乳牛たちと同じスタイルにはいられず、別の場所で広いスペースを使い飼育していました。近くに別の牛がいないことにより、エサを奪われるのを防ぐことは出来ましたが、徐々に食欲も落ち、遂に自分の力で立つことすら出来なくなってしまうました。偶然双子で、通常の子牛

よりもサイズが大きかったということで母牛は弱り、と畜せざるを得ませんでした。可哀想ですが、酪農を営むうえで搾乳ができない牛を飼育することに利益はなく、飼料代などのコストばかりがかかるので、時にはと畜などの判断も必要だということを学びました。

今回のと畜の原因は防ぐことが出来ませんが、その他肢蹄の病気など、事前に私達人間の工夫や行動によって対策が出来ることについてはできる限り努力していくことが必要で、経営者にとっても牛にとっても大事なことだと思います。少しの工夫で牛たちも健康に生活でき、治療費などの削減や労働力の軽減にも繋がると考えられるからです。今後も日々の管理をしていく中で、真剣に向き合い、牛が快適に暮らせる環境作りを指すと共に、作業効率の改善にも力を入れていきたいです。

優秀賞

命の重さ

海老名市立有馬中学校

一年 時田 愛子

これは私が飼っている「さくら」という一匹の犬から学んだ命のお話です。

さくらが家に来たのが十年前、元々は普通の家に飼われていたのですが、ある日その家族がさくらをおいて夜逃げをしてしまったのです。数日がたち、大家さんと保証人の人が家を訪れると何日もご飯をもらえなくて、衰弱しているさくらが見つかりました。そこでさくらは一度保証人の家に行くことになりました。ですがブリーダーであった保証人はすでに何匹もの犬を飼っていて、その犬達は「家族」や「兄弟」などの関わりを持っていました。ご飯をもらう時、噛まれてしまわずとももらえずにいました。そんなある日、保証人と偶然知り合いだった私の叔母にあたる人が一匹のボロボロなさくらを見かねて、私の二才の誕生日プレゼントにと家に連れて来たのです。それがさくらとの初めての出会いでした。最初両親はさくらを飼うことに反対していましたが、私とお姉ちゃんが「飼いたい」とお願いし、最終的には私達家族でさくらを飼うことにしました。

さくらも私達に懐いてくれるようになり、私自身もお世話に

慣れて、幸せに暮らしていた日々の中で、さくらの便の下痢が多くなり、だんだんと血の色になってきたのです。母は病院に連れて行き、診察を受けたところ「問題なし」ということで下痢止めの薬を貰ってきただけでした。ですが、さくらの状態は一向に良くならず、薬を飲ませても下痢が止まりませんでした。そこで病院を変え、もう一度診察を受けたところ、腸にガンが発見されたのです。さくらがかかってしまったのは「リンパ腫」というもので、手術をしましたが、血液によってどんどん転移してしまいうガン的一种でした。そのリンパ腫を治すことはできず、抗がん剤で進行を抑えることしか出来ない状態でした。抗がん剤を打つには毎週一万七千円というお金がかかること、さくらの状態に合わせて抗がん剤を変えるなど、さくらの身体的にも大きな問題があったのです。私と母は一回家に帰ってから話をしました。どちらを選択すればさくらにとって幸せだと感じられるのか、抗がん剤が合わずに死んでしまったらどうしよう。また、さくらと似たケースで他の人はどのような選択をしたのか、体験談をインターネットなどで調べてみました。色々な意見や判断を見て私は改めてリンパ腫の恐ろしさを知りました。母も一緒になって考えて、話し合いをして、私が出した答えは「抗がん剤を打つ」ということでした。理由はさくらが死んでしまった時、後悔をしたくなかったから。「あの時やっぱり…」そう思うのが怖かったからです。それなら今出来ることを全部やってあげた方が良いかもしれない。抗がん剤を打つこ

とによって今の状態より良くなる。その時まで小学生だった私はそう簡単に考えていた部分もあったのだと思います。私はそのことを母に伝えました。母は「じゃあ病院の先生にも伝えなきゃね」と私の意見に賛成してくれました。病院の先生も一緒に考えてくれて、私と母の意思を伝えると「一緒に頑張りますよ」と言ってくれました。母は一生懸命働いて家計を支えてくれて、私は主にさくらのお世話や薬の管理をしています。時々、「面倒くさい」とか「どうして私が…」と思ってしまうことがあります。でも、小さい頃のことやさくらが病気と闘ってくれている姿を見ると「どうしてこんなこと思ってしまったのだろう？」と反省します。さくらの状態は前よりも良くなって、元気に過ごしています。

私はさくらから、今を生きる大切さ、一つの命の重さを感じました。最近はずぐに「死にたい」とか、「生きるのが飽きた」など、命を簡単に考えている言葉をよく聞きます。私も前まではそうでした。でも一匹の犬から教えてもらった命の重さは、これからも忘れることは絶対にありません。

病院の先生が季節の変わり目にこんなことを言います。手術後は冬だったので「春には桜の花をさくらちゃんと一緒に見られるといいですね」。桜の花と一緒に見ることができました。次の言葉は「夏の花火が見られると良いですね」と言われました。さくらは今も頑張つて生きてくれています。今度の目標は私が「冬の雪が見られるように、さくらと前向きに生きていこ

う。」そう思いました。

優秀賞

命てんでんこ

開成町立文命中学校

二年 萬年 環

三月十一日、東日本大震災のあの日、私は日本にはいなかった。だから自分はこの国、周りの地域で大きな災害による被害を直接受けたことがない。あの日皆がどんな恐怖を覚えたのか、それを身で感じてはいないが、あの日いたアメリカのテレビのニュースで「Japan...had...TSUNAMI」と聞いた時は、日本にいた祖父母や友達が心配になったし、帰国できるかどうかも分からなかった。そんなどうしようもない不安。それをあの日皆は感じたのだろうと勝手に考えていた。全校集会、始業式で校長先生による「命のてんでんこ」という作文の朗読を聞いた。その際、地震が起きて三日目に電気も水もガスも復旧している祖父の自宅へ行った筆者が「落ちつかず、じっとしていられたかった。」と語るシーンがある。そこでなぜ筆者はそのようにじっとしていられたかったのだろう、という問いが出された。私はおそらく、「まだ地元には電気や水も復旧していない中、自分だけなぜ安心してせいたくな場所にいられるのだろう。」という罪悪感にも似た疑問を持ったためだと考えた。また友達は、「まだ助かる人がいるかもしれないのなら助きたい。」と思っ

たからでは、と予想していた。私はどちらにせよ、こわい経験をしたにも関わらず、すぐ他人のことを考え、行動に移そうとする筆者がたのもしく、立派に見えた。自分も、ひとまず命を守れたのなら、他人のために動ける人になりたいと思った。

命てんでんこ。この言葉には例えそれぞれがてんでんこに、てんでんばらばらに逃げようが、命が助かったのなら、次へ進むことができるし、まためぐりあうことができる。だから何よりも命を大切に。という思いがこめられていると思った。そのことが分かってくると、「命を大切にしよう」と伝えたい、「決してあきらめずに僕らの未来をつくりたい」という筆者の思いがひしひしと伝わってきたような気がした。

災害の中でなくても、親からもらった命の重みを感じながら日常の中でも命を大切に生きていきたい。

優秀賞

カンタータ「土の歌」を鑑賞し、調べ学習を通して

「いのち」について考えたこと

神奈川県立港北高等学校

一年 高向 みのり

第三章 死の灰に「ヒロシマの また長崎の地の下に泣く いけにえの霊を偲べば 日月は雲におおわれ 心は冥府の路をさまよう」とありました。これはだれもが知っている広島と長崎の悲劇のことだと思っています。広島と長崎では原爆で沢山の人が命をおとしました。皮膚も溶けた人間がいたるところに倒れ、積み重なっていたと聞きます。小学校や中学校で、この出来事のこととは習いましたが、あまりにも悲劇的すぎました。まだまだ知らないことは沢山あると思います。それは大人になるにつれて学ぶべきことだと思います。今、戦争を体験しない時代になり、あの恐ろしさを知る人が少なく、また同じ間違いを繰り返してしまっていると思います。それを少しでも避けるためにこの歌が生まれたのだと思います。歌は、どの時代になっても継がれていきます。歌詞やリズム、強弱などでいかに伝わりやすくするかを魂を込めて作られたと思います。私は、その音楽づくりはまだ続いていると思います。指揮者、演奏者、一人一人が歌の意味を理解し、聴く人に伝えようとしています。「決して同じ間違いをおかし

てはならない。」と。

私はこの歌が歌い継がれていくことを願います。戦争は100年に一度起きるとも言われています。最近は隣国のミサイル発射など、戦争を身近に感じる事が多くなりました。どうかこの歌と意味が沢山の人に届き、平和な日々が続きますように。